

帽子を…

なだ いなだ

帽子を…

なだ
いなだ

帽子を…

昭和四十一年九月二十五日 第一刷

定価四百五十円

著 者 なだ いなだ

発行者 上 林 吾 郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 図書印刷
製本所 矢嶋製本

*万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

目次

帽子を……	3
海	23
神	43
再会	73
どろの人形	97
会議	119
童話	159

装
幀

上
矢
津

帽子を……

ロベール・カン氏は著名な音楽批評家である。パリの音楽界では彼を法皇ペールとよんでいる。それにも一理あることを認めるが、私としてはむしろ予言者という名をあたえるべきだと思っている。世間には批評された人間が必ずむかつ腹を立てたくなるような批評家がある。原因は書かれた内容にあるのではなくて（内容はむしろ正当なことが多い）書いた人間の方にあるらしい。又相手をいい気にしてしまう批評家もあるが、これは残念ながら余り数が多いとは言えない。そのほかに、相手のことなど問題ではなくて、もっぱら自分の博識を人に示すための道具と批評を考えているものもある。

だが、法皇ペールとよばれるこの批評家に関しては、人々の示す態度も幾分変っていた。彼の言葉は殆ど運命ということと同じだった。（アーメンというのはヘブライ語でかくあれかしの意だが、法

皇^フという名の出どころはそんなところだったかも知れぬ。カン氏が立派な芸術家だと言いさえすれば、その男は立派な芸術家に違いなかった。

しかしことわっておくが、彼は決して自分の意見を絶対的なものとして大衆に押しつけようなどという気持を持っていなかった。彼は自分の判断に強い確信を持っていた。それ故に幾分偏屈なところのある人間なのだと、自分で自分のことを思っていたが、大衆の方で彼の意見を一つの動かない真理と見ていたのだ。

先年、飛行機事故で不慮の死をとげた天才ピアニストのボーチは、長年キャバレの酔客相手の不遇な生活をしていた。それをカン氏が偶然見出したのである。そして人々は何のためらいもなく、この新しい才能の出現に拍手を送ったのだった。

同じようにして、何人かの有名な才能が彼によって見出され、世に出た。それと反対のこともあった。彼の一文によって文字通り消え去って行つた幾人かの芸術家もあったのだ。確かにカン氏の言うところは正しかったに違いない。何故と言つて、彼のいうとおりにならなかったことは一つとしてなかったからである。彼が天才だと言えば天才であるのだし、二流の芸術家だというものに一流の芸術家があつたためしはなかった。彼に諦めると説かれたものは、無駄な努力を払つてもとれない才能のために一生を棒にふるないですんだのである。

だからと言って、彼に個人的なうらみを持つものや、彼の批評に対して泣言を言うものは一人

もない。第一、カン氏はそんな感情を抱く相手としては余りにも孤絶したものを感ぜさせていた。

でも、彼の批評にプラトンの卓越した比喩的表現や、或いはアントニウスの催眠術的説得力というべき巧妙な論理が満たされていたのだからと考えるのは誤りである。彼の批評は、ありうるかぎりの平凡な表現以外に何でありえたらう。

とすると、大衆の彼に寄せる信頼感はどこから来たのだろうか。

今となつてはすべてが伝説である。最早真実と作話の限界を知っているものは誰もいない。その伝説によると、このロベール・カン氏は素晴らしい低音歌手であつた。その話を信じよう、彼は正しく天才そのものであつたのだ。

三十年も前のことになるが、伝統あるバリ音コンセルヴァトワール楽院の卒業コンクールが、一瞬きちがいじみた騒ぎでつまれるような事件があつた。その時の審査員の一人の口をかりて言えば、それこそ「奇蹟の低音」の出現だつた。勿論それがロベール・カン氏の登場であつたことは言をまたない。ものものしいジェスチュアと誇張したお世辞のこの上なく好きなフランス人達のことである。審査員は全員自席から立上ると彼目がけて手を差しのべた。騒々しいことにかけては世界の一流で、下手な寄席芸人などを弥次やじり倒す位朝飯前の、そしてことさら何か事件の起ることが無類に好きなバリの聴衆の示したこの際の反応は想像にまかせることにする。

これはつけたりであるが、ロベール・カン氏の歌を聞いた、当時たまたまパリに住んでいたシヤリアピンは、あとでただ一言「彼の次はこの私だ」と言ったという。私には真偽のほどが確かめられぬのが、甚だ残念である。

しかし不幸ははやばやと起った。卒業後間もなく、オペラの舞台を踏む晴れがましい日がやって来た。そしてそれは彼には運命的な日でもあった。

彼の役はムソルグスキーの歌劇の傑作、ボリス・ゴドノフのボリスであつた。この歌劇はパリのオペラ座の伝統的なレパートリーの一つだが、皮肉なことにボリス役の歌手をお膝元に見つけることがむづかしく、公演の度ごとに外国の有名な歌手がやって来ていた。こんな状態は何も熱狂的な国粋主義者でなくとも、充分残念なことに違いない。ロベール・カン氏の出現は当時の人に大いに歓迎された。

初日の大成功は、ちよつと我々の想像のつかぬものであつたらしい。それから数十年たって、バルカン生まれの当代の名歌手ボリス・クリストフが同じ舞台でしかも同じ役で、新聞の表現によると前代未聞の成功を収めた。これは確かに素晴らしいものだった。にもかかわらず長年オペラ座の案内係をしていて、たまたまロベール・カン氏の初日を見たことのある老嬢の記憶に頼ると、それとこれでは虎と猫の差は充分にあるらしい。

だが二日目から、そして永久に、もうこの天才歌手の舞台を見ることは出来なくなつたのだっ

た。

花束がいけなかったのだ。初日に彼が受けたファンの花束の百合の花粉か何かが。

それが彼の一生についてまわることになった「ぜんそく」という持病のそもそのきっかけだったのである。今のパリであつたら、パストゥール・ヴァレリイ・ラド教授の治療でも受ける方法があつたろう。だがその時代の貧弱な医学的方法を以てしては、殊に歌手という才能を持つ者には、それはあらゆる希望を放擲させるに充分すぎる材料だったのである。

悲劇はその主人公を偉大にする。日常的なものにかかずらう人間が、実際よりも卑小に見えるのと同様に。

音楽批評家ロベール・カン氏が誕生したのはそれから間もなくだった。

批評家に対して二流の芸術家たちのかえす言葉の中で、一番月並なそれだいて批評家達のコムプレックスをさかなでするものは「では自分の作品を見せたらどうですか」である。これは批評の機能を見殺した発言で、トルストイを批評するものはトルストイ以上の作品を書いたものでなければならなくなり、無茶な言いがかりだが、だからと言って「さようございます。自分にはトルストイのような才能ありません。だから批評家などになりさがっているのです」とは言

えるものでもない。

こうした状況を考えて見ると、ロベール・カン氏は批評家として殆ど、はかりえない資産を持ったことになる。人々はあの月並なひらきなおりや、かえす言葉を機械的にのどもとまでこみあげさせた時、ぎょつとしてこの相手を見直さねばならぬ道理だったからである。

九月の声を聞いたパリには、もうかけらほどの夏も残っていない。ここの季節はためらいなどというものは知らぬと見える。マロニエは八月のなかばから下葉を落しはじめ、乾いた枯葉の音が通行人の足音にまじるようになる。空の色が最も気が早い。そこには南国から来た者をどきりとさせるような冷え冷えとした冬が、静かに色を増している。そしてひとときわ陰影の多くなつたパリの街じゅう、きらびやかな色彩を競いあうように、画展や音楽会やオペラや芝居のポスターで一斉に賑いはじめる。

そこに、夏の間外人旅行者達にこの旧都をあけわたしていた主人達が、乾草のにおいや潮風の香を肌にしみこませて帰って来る。それが夏休みあけという短い忘れ難い季節だ。

ロベール・カン氏も地中海の海岸の別荘^{ヴィラ}から、ルクサンブル公園とは道一つへだてただけの彼の家に帰って来た。ショートパンツとアロハシャツを濃いグレイの背広に着替え、顔だけはアラビヤ人のように日焼けして。

彼は三階にある自分のアパートマンまで門番に手伝ってもらって荷物をあげると、留守中掃除に來た家政婦が事務机の上に積み重ねて行つた手紙の束などには目もくれず、すぐと散歩に出た。夜行列車で歸つて、デイジョンを過ぎる頃から目が覺めていたので、多少の疲れを感じないわけでもなかったが、久し振りに午前中のパリを歩いて見ることは、それなりに彼にとって充分に誘惑だった。

彼は家の前の通りを横切ると、そこにある小さな鉄門からルクサンブル公園の中に入った。右手の花壇の方はひっそりとしていた。左手の公園のマロニエの大きな樹牆じゆしょうはもう大分色づいていた。これが日曜日だったら、このあたりの丸い鉄のテーブルを囲んで、幾組かのプロットの遊び仲間が見られる筈だった。そして日当りの鉄椅子の方には、晩秋のこの公園の名物の一つでもある、冬の蠅を思わせる厚着で緬羊のようにもくもくとした老婆達のじつと動かない姿が、ちらりほらり見え始めていた。

公園の中央にある大噴水の池のまわりを廻つて、彼はサン・ミッシェル通りを目ざして歩いた。そのあたりまで公園の柵に沿うて屋台をとめている焼栗屋の香がとどいた。その香をかきながら、彼は同じ男が十日も前には同じ場所でアイスクリームを売っていたことを考えた。それが休暇明け時のあわただしい彼の氣持に更に拍車をかけるのを彼は感じた。カン氏は喘息もちのつねで、においというに犬のように敏感だった。彼にとってどの新しい季節も、たとえば焼栗の香

がそうであるように、必ずそれを確かめさせる香があったのである。

サン・ミッシェル通りに出てソルボンヌの前を通り、サント・シャペルの尖塔を目指して坂を下る、それが彼の殆ど変らぬ道順である。この街角は彼の庭と言った方がよいかも知れない。彼は一つ一つの街角、店の飾りつけ、映画館の広告などを、それこそ植木好きの老人が一枚一枚の葉を確かめて見るようにたんねんに眺めて行くのであった。

その彼がちやうどサン・ミッシェル通りの半分程の所まで来ると、広告塔の上に今しがた貼られたばかりの、一枚の音楽会のポスターの上に、彼の視線は釘付けになった。はしの方ははみ出した糊が乾かないで未だ光っていた。

ロバート・トーマス再訪、独唱会

サル・ガヴォにて

日時……

カン氏のそれを見つめたままの顔色は、いらだった彼の氣持を伝えるように、急に赤くなり、それから蒼白にさえた。低いうめき声さえ、彼の口からもれて来るようだった。

「よくもぬけぬけと。これは公然たる侮辱だ。でなければ挑戦だ」

ロバートすなわち通称ボップ・トーマスは合衆国生まれのニグロ歌手である。しかもちょうど三年前、このパリで、しかもサル・ガヴォでデビューすると一躍世界的な名声を得るようになった歌手なのである。

そのデビューの日の二三日前、カン氏はフランシス・ガリキン氏の不意の訪問を受けた。何しろ持病があつて殆ど社交場らしい場所に顔をつつこんだこともないカン氏は、相手が何かと風評の多い人物などとは知つていよう筈がなかった。彼は中柄で余り似合いそうもない濃いグレイのダブルを着込んでいた。それというのも、ハリウッドの映画によく出て来るベービー・フェイスのギャングに似た顔をガリキン氏が持つていたからであらう。彼はニューヨーク生まれのユダヤ人であつた。

カン氏が客間に入つて行くと、女中に案内されてそこにいたガリキン氏は壁にかけられた婦人像に見入つていた。そしてカン氏が近づいて来ると、その方を振り返りながら言つた。

「アングルですな」

「偽のです」

カン氏は至極ぶっきらぼうに答えた。

「ほほう、それにしても真物よりも良い位ですな」

「そうですか。ピカソの習作時代のものだという噂もあります。噂ですがね、単なる」

カン氏は無愛想に要件は何かとたずねた。ガリキン氏はカン氏の力を藉りたいことがあるのだと言った。

「カン氏。実は私もですな、ゴッホやセザンヌのような純粋な芸術家になりました。それはもうそういう時期もあったのですな。だが私は帽子作りになった。婦人帽のデザインを今はします。だが私の心の中には未だあの時の純粋な気持が残っていて、若い芸術家達を見ると何か援助してやらねばならぬ気がするのです。その一人がロバート・トーマスですが、音楽というやつは私にはわからなくて、彼を今度サル・ガヴォで歌わせるようにしてやりましたが、一体それだけの価値があるものやら、貴方の御意見を伺ってみたいと思ひまして……」

特別に忙しくもなかったカン氏はこのニューヨーク生まれの男の頼みを引受けたのであった。そして二人はカン氏の家から遠くないモンパルナス通りのボツ・トーマスのアトリエに出掛けた。

そのアトリエの一階が花屋だったが、ガラス戸に大きくフロリストという綴りがアーチ形に書かれ、その裏側に蒸気がたまって濁っていた。二人がアトリエへの階段口に足を入れようとした時、一人の婦人がひとかかえの花束をかかえて入口から出て来た。その事がカン氏に何か不吉な、それと同時に不愉快な感じを与えた。